

日本岩石鉱物鉱床学会 渡邊萬次郎賞 第21回 受賞者

岩崎 正夫 会員

岩崎正夫会員は、変成岩岩石学と地域地質学の分野で活躍し、重要な論文を国内誌と国際誌に発表してきた。彼は1960年代初頭まで、四国三波川変成帯、高越山・眉山地域の結晶片岩の岩石学的研究を東京大学の都城秋穂氏指導の下で行った。関陽太郎氏や坂野昇平氏とともに低温高压型変成相系列に沿った累進的変成反応の研究を進めるとともに、変成岩から分離した鉱物の化学組成を決定し、アルカリ角閃石やヒスイ輝石の固溶体組成の広がり研究にも重要な貢献をした。

岩崎会員は、1960年代後半から1970年代前半にかけて、オフィオライトの研究の重要性に気づき、四国三波川帯低温部に属するミカブ帯の研究を開始した。以後、退官するまでオフィオライト研究の日本の代表者として、国内外のワークショップに参加あるいは主催し、オフィオライト研究の重要性の啓蒙活動を行った。彼自らは四国東部のミカブ帯の地質学的研究に集中し、1:5000の詳細な地質図を作り、オフィオライト層序の復元を試みた。また全岩化学分析、残存単斜輝石の組成分析等を進め、ミカブ帯のオフィオライトが構造的に不安定な縁海底起源であろうと主張した。ミカブ帯の緑色岩類が主としてオフィオライトの碎屑性堆積物であることを明らかにしたのも重要な貢献である。

1970年代から1980年代にかけて、日本列島の地質体が付加体起源なのか、現地性のもなのかについて重要な論争がおきたが、岩崎会員は、オフィオライトの地質学から、ミカブ帯が全体として海洋プレート起源の異地性岩体であり、日本列島に付加された海洋プレート物質であろうと主張した。まもなく微化石による付加体の実証時代が訪れるが、岩崎会員の研究はそのさきがけとなった。岩崎会員は市川浩一郎氏、八尾 昭氏、ミッシェル・フォーール氏らとともにオフィオライトの放散虫チャートからジュラ紀末期ないし白亜紀初期の示準化石を発見したが、それはミカブ帯付加体起源説の決定的証拠になっただけでなく、三波川変成作用の時代論にも大きな制約を与えた。

岩崎会員は、1970年に1年間、オランダのダルーファ氏の元に文部省在外研究員として渡欧し、オフィオライト研究の世界の最前線の状況を視察・見聞する機会を得た。またこの時、一つの変成岩の中に複数回の異なる変成相の記録が岩石組織と構成鉱物の累帯構造として残されていることに着目し、帰国後、それを解析することの重要性を説いた。これは後にP-T-t経路の解析へと発展する変成岩研究の新しい方向であった。ダルーファ氏が1970年代初頭に提唱した plurifacial metamorphism の概念は今日では常識となっているが、それが岩崎会員の努力で日本の学会でも普及し、やがて、ほとんどの研究者がその方向へと研究を進めるようになったことも重要な功績である。

以上の業績、とりわけ、広域変成岩の先駆的研究およびオフィオライトの先見的研究により、岩崎正夫会員を渡邊萬次郎賞 21回受賞者として推薦する。

岩崎 正夫 会員の略歴

大正 11年(1922年) 9月 26日 生まれ
昭和 15年 3月 奉天第一中学校卒業
15年 4月 旅順工科大学予科入学
17年 9月 同上修了
17年 9月 旅順工科大学採鉱学科入学
20年 8月 同上卒業
20年 8月 旅順工科大学講師
22年 3月 引き揚げにより退職
22年 10月 東大理学部大学院(旧制)入学(地質学教室)
25年 9月 同上 退学
28年 2月 徳島大学学芸学部助手
30年 9月 同上 講師
37年 2月 東京大学より理学博士の学位授与
学位論文「四国東部高越・眉山地域の変成岩類」
37年 11月 徳島大学学芸学部助教授
46年 11月 徳島大学教授(教育学部)
60年 4月 徳島大学教授(総合科学部)
63年 3月 定年退職(1988年)
63年 4月 徳島大学名誉教授 応用地質株式会社技術顧問
平成 6年 3月 応用地質(株)退社
平成 6年 4月 岩崎地質研究所創設
平成 8年 4月 ラビス大歩危石の博物館館長
平成 18年 3月 ラビス大歩危石の博物館館長退職
現在に至る

日本岩石鉱物鉱床学会
渡邊萬次郎賞審査委員会

委員長 廣井 美邦